

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第卷七十五第

口繪 經濟學部學徒出陣壯行式寫真

ヒックス利子理論について……………高田保馬

増税問題……………汐見三郎

強制及び勸誘貯蓄の體系……………小島昌太郎

近代資本主義經濟の二つの側面……………青山秀夫

アンシアン・レジームの經濟段階……………河野健二

選擇理論の立場から見たる  
デュブイの相對效用について……………園正造

戰時財政と經濟統制……………有井治

彙報

本誌第五十七卷總目錄

行發月二十年八十和昭

# アンシャン・レジームの經濟段階

——オーゼとセーの見解について——

河野健 二

## 一 序

中世末期からフランス革命にいたる約三世紀の期間は、謂はゆるアンシャン・レジームの時代として一括されてゐるが、このアンシャン・レジームを經濟史の一過程として眺めるときには、われ／＼は之を都市經濟の時代から近世資本主義の成立にいたるまでの過程であると言ひ換へることが出来る。今もし都市經濟時代と近世資本主義との間をつなぐ時期を重商主義の支配した時代、あるひは重商主義の時代と呼ぶことが許されるならば、アンシャン・レジームの時代はすなはちフランス重商主義の時代に他ならないこととなる。したがつてアンシャン・レジームの經濟段階を問題にすることは、即ちフランス重商主義の段階規定を行はうとすることに他ならない。

一般に重商主義時代の經濟構造をいかなるものとして把握するかの問題は、すでに幾たびもその解明が企てられたのみならず、現在においても再び熱心に問はれつゝある問題であるが、元來、重商主義はアダム・スミスによつて始めてその理論體系としての存在が確認され、轉じてリスト、シュモラー等のドイツ歴史學派に屬する人々によつて重商主義の經濟段階への組入れ作業が行はれ、さらにゾンバルト、ヘクシャーなどによつてその經濟構造の一層の明確化が試みられ來つたものである。ゾンバルトは周知のやうに、重商主義をその當初の形態にお

1) 矢口孝次郎著；イギリス政治經濟史，初期王政と重商主義，125頁以下。

いては擴大された都市の經濟政策と規定するとともに、この擴大された都市の經濟政策が君主の貨幣調達といふ目標を追求する結果として、いまや向上しつゝある資本主義との共同事業に到達すると考へる。すなはち都市經濟の擴大されたものとして成立した重商主義は、その成立ののちには向上の途にある近世資本主義と結びつくと考へることによつて、重商主義と近世資本主義との聯關を強調し、かくして重商主義すなはち初期資本主義なり、といふ注目すべき規定が生まれてくるのである。重商主義を初期資本主義と規定するこのゾンバルト流の考へ方は、多くの人々によつて承認され、今日における支配的な學説たるの地位を占めてゐるかの如くである。

本稿はアンシャン・レジーム、言ひ換へればフランス重商主義の時代を對象としつゝその經濟段階を問題とするものであるが、同時にこれによつて重商主義を端的に資本主義の起點と考へる見解が、果してフランスの歴史の時代に對しても妥當するものであるかどうかを検出せんとする意圖をも併せ有つものである。重商主義を初期資本主義とするこの見解に隨ふならば、もろくの重商主義的諸實踐は正しく近世資本主義の成立を促進し可能ならしめるためのものであり、それ以外のものではないといふ事になるであらうが、もしこの見解が正當であるとするならば當然それは重商主義の時代において近世資本主義を成立せしめるに至る諸要素がすでに存在すると、つまりは産業資本が存在することを前提し、重商主義的諸實踐はこれらの産業資本を育成するためのものであつたと言ふことではなければならない。とするならばこの時代における産業資本がいかなる形態のものであつたか、問はれてくるが、それに對する解答は産業資本の初期の形態たるところのマニユファクチュア或はその萌芽形態であるとして答へられるのが通説である。かくして本稿における問題は次のやうに置き換へられる。すなはちフランス重商主義の時代において謂はゆるマニユファクチュアがどの程度に存在し、それがいかなる役割をも

2) ゾンバルト。岡崎次郎譯；近世資本主義，第一卷，第二册，535頁。

つてゐたかを見究めることが是である。このために、われ／＼はフランス經濟史學を代表すると思はれる二つの見解を擧げて、これを検討しようと思ふ。

## 二 アンリ・オーゼの見解

さてフランス重商主義を近世資本主義の起點と考へる見解、あるひは言ひ換へればフランス資本主義の起源をアンシアン・レジームに求める見解は、フランスにおいては之をアンリ・オーゼ (Henri Hauser) に求めることが出来ると思はれる。そこでわれ／＼の仕事はアンリ・オーゼの見解を明にすることから始められる。オーゼはその論文集「資本主義の端初」(Les debuts du capitalisme) 中の論文「フランスにおける近世資本主義の起源」<sup>1)</sup> においてこの問題を扱つてゐるが、そこにおいて彼は先づ歴史的時期としての資本主義制度を次の三つの特質において把へる。すなはち(一)、勞働用具が機械であること、(二)、資本の集中が行はれること、(三)、資本家と勞働者の對立が生ずること<sup>2)</sup>。これによつて見れば、オーゼがアンシアン・レジームにおいて問題にせんとする資本主義は機械を使用する工業とくに機械制工場工業であることが分かる。もつとも彼は機械制工業とマニユファクチュアとの區別を認めてゐない<sup>3)</sup>が、その所論の全體においては兩者を同一視する見解の上に立つてゐると見られる。さてオーゼの理解するかゝる資本主義は、フランス經濟史において如何に發現してゐるであらうか。またアンシアン・レジームはオーゼによれば如何なる經濟段階に屬すると見られてゐるであらうか。

(一) 機械、およびその生産への適用を可能ならしめるものとしての技術的分業について見るに、十三世紀には毛織物業において僅かに分業の萌芽が見られる以外には殆んど問題となるべきものを認め得ないが、十五世紀

1) Professeur à la Sorbonne et au Conservatoire national des Arts et Metiers.  
2) "Les origines du capitalisme moderne en France". Les debuts du capitalisme. Chapitre Premier.  
3) Ibid., p. 3.

に入るとともに機械制工業の最初の進歩が現はれる。すなはち水車は小麦粉や澱の製造から紙の生産とか鍛冶屋の鐵槌を動かすためとかに使用され始めるし、印刷その他當時の新産業と呼ばれる殆んどすべての工業においては、すでに道具以上の機械が用ひられる。宗教戦争後はさらに機械主義の進歩が著しく、ラフマスは十七世紀初頭において鐵加工の水車槌や糸繰機について語る。<sup>5)</sup>次に分業について言ふならば、地理上の發見による市場の擴大は、大量生産したがつて分業の導入を齎らし、それを完成せしめた。すでに十五世紀の半ばには鑛山採掘業にこれを見る事が出来るが、降つて十六世紀にはリオン、ツールなどの絹織業において織工・染工・絲縫工・絲繰工等の區別が行はれてゐることを知ることが出来る。次いでコルベールが多くのマニユファクチュアを創設し獎勵したことは餘りにも有名であるが、これらのマニユファクチュアが組合規則の制限外に在つて自由に機械上の發明を採用したことは言ふまでもなく、大工業 (Grande Industrie) の成立はかくして決定的となり、特に十八世紀後半には生産用具の完全な更新が行はれる。水車の増加、ピユフオンの高爐建設、ヴォーカンソンによる綴織・絹織機の改良等々がこれである。『十八世紀末のフランス産業は、かくして機械制の専門化産業である。たゞマニユファクチュア時代から決定的に機械制工業時代へ移行するためにそれに缺けてゐるものとしては、もはや單に蒸汽機關に關する知識、といふよりは寧ろその適用のみである』<sup>6)</sup>勿論、これによつてこの時代のすべての産業が機械化したと言ふことは出來ず、歴史の常としてその傍には手工業組合所屬の少工業が依然として殘存したことは言ふまでもない。このことはオーゼも明瞭に認めてゐるところである。たゞ以上によつてオーゼが實證せんと欲した點は、アンシアン・レジームの時代において既に機械と技術的分業が見られること、而もそれがアンシアン・レジームの枠内において成長し且つ完成すること、これのみである。

4) Ibid., p. 7.  
5) Ibid., p. 11.  
6) Ibid., p. 16.

(二) 勞働用具の機械化とそれに必要な分業の完成とは、資本の蓄積を前提とすることなくしては不可能である。したがつて次にはこの事が問題となる。『資本の最初の出現、すなはち自己の勞働とは別個に所有者にとつて所得を生ずるところの富の最初の出現は、分業の最初の出現に先行したものであつて、後続したのではない。』十字軍以後、自然經濟から貨幣經濟への移行とともに、このことは貨幣を取扱ふ一聯の人々——ユダヤ人、ロシヤ人、バルヂア人、教會、王權、爲替業者、商人、貴族等——の擡頭を齎らし、最初の資本集中が商業の部面において現はれる。キリスト教世界における經濟生活のかゝる動産化は、教會法理論の上において多くの問題を惹き起したが、更に進んでこれらの資本は今や産業に利用され始める。革命は先づ毛織物業において實現され、そこでは舊來の手工業者と竝んで、自らは織布や仕上げに従事せずして、織職人、仕上げ職人、梳毛職人、梳き職人、毛打ち職人、染職人の全軍を自らの費用で使役するところの *drapier* が出現する。これらの資本家はすでに多數の勞働者の上に勢力を及ぼし、例へば一四〇三年シャルトル市のみにおいて、毛織物業は『優に一萬の人々』を生活させたと言はれてゐる。<sup>7)</sup> つゞいて、十五世紀の海上發見、廣大な市場および新生産中心地の形成、莫大な貴金屬の流入等の現象は、十六世紀に入つてルネッサンスと宗教改革と國際金融の醒しい發達とを喚び起した。リオンは商品および貨幣の國際的な大取引市場となり、大銀行家はその所有する金塊の重さでもつてヨーロッパの政治に壓力を加へ始める。金融の驚くべき發達と符節を合して謂はゆるルネッサンス産業が出現し發展するが、これらの産業が新しい生産用具と莫大な回轉資本と多數の勞働者とを用ひて運營されたことは言ふまでもなく、例へば絹織業は十六世紀以來さきの毛織物業と同じく資本主義的職業 (*capitalist*) と成るに至る。舊來の手工業は之に對して猛然たる抵抗を試みるが、すでに同業組合自身の中において分解の傾向が始まり、富裕な

7) *Ibid.*, p. 18.  
8) *Ibid.*, p. 23.

メンバーは組合の支配權を掌握し、貧民の親方への途を狹隘ならしめ、宣誓組合においてすら十六世紀には寡頭支配の資本主義的な制度となるに至るのである。資本の集中は特に大産業においてその後の二世紀間を通じても同じく進行するが、アンリ・オーゼはその一例として一七一二年におけるリオンの絹織業親方の分類を示してゐる。それによれば、絹織業に従事する親方は次の三種類に分れる。<sup>10)</sup>

A 親方兼商人 (*maîtres-marchands*) — 自らは仕事場を持たず、生糸や金箔や圖案を親方兼労働者に交付し、手間賃を支拂ふ。彼等の數は約二百人で労働市場を思ふ儘に支配する。

B 獨立の親方 — 舊來の型の親方、自己の計算で労働し、商人と労働者とを一身に兼ねて生糸を買ひ、それに加工し、絹布として販賣する。彼等の數は不定であり、僅かの打撃を受ければ賃業者に轉落する。

C 親方兼労働者 (*maîtres-ouvriers*) — 三千乃至四千人に達し、資本の集中が顯著であるために、時として一人の親方兼商人の下に、職人は別として、百人にも及ぶ親方兼労働者が従屬することがある。彼等は親方兼商人から原料の供給を受け、労働力のみを提供する。

このやうな資本集中の傾向は、コルベールの對策にも拘らずその後も一層進行し、産業指揮者の至上權は從來にも増して確固たるものとなり、これに伴つて小工業は次第に消滅するが、集中的大工業のみは常に發展しつゞけて農村人口を都市に吸収し、労働者の大群を作り出すのである。<sup>11)</sup>

(三) 宣誓組合あるひは一般に組合制度が支配した時代においては、資本と労働との對立したがつて労働者の團結もまた現はれないことは言ふまでもない。しかし史料はすでにそれが十三世紀に發生したことを教へてゐる。一二八五年におけるルアンの織物職人と織物商商との紛争がその一例である。資本と労働との分離は、その

9) *Ibid.*, p. 27.

10) *Ibid.*, p. 28.

11) *Ibid.*, p. 30.

後十四世紀から十六世紀にかけて進行するが、それは特に親方権利金の引上げと傑作制度の複雑化によつて、労働者を手工業組合の内部から次第に排除することによつて遂行される。この傾向は一五八一年に至つて頂點に達すると見られるが、ことに職業統制を缺いてゐた自由な手工業とカルネッサンス産業においては、その進行は一層顯著であつたと言はねばならない。事實、十六世紀においては賃銀引上げを目的とした労働者の團結あるひは反抗が到るところに現はれるし、コルベールの時代および十八世紀に入つて罷業が一層頻繁となり且つ激烈となることは既に周知の事柄に屬する。これとともに労働者の團結に對抗して、雇傭主側もまた同盟を結成するに至るといふ特徴的な事實は、アンシアン・レジームの時代における資本と労働との對立を物語る以外の何物でもない。例へば一七七五年、リオンの親方兼商人は、労働者の賃銀を引下げるために同盟を結成し、その加入を拒む者は叛逆者と見なされ、産業からの立退きを強制されたことは之を示すものである。<sup>12)</sup>

アンリ・オーゼは以上のごとく、機械の採用、資本の集中、資本と労働の對立、の三點からフランス經濟史を檢討し終つてのち、次のやうな結論を與へる。『十八世紀末の個人主義革命（一七八九年を指す）引用者および産業革命は、資本主義制度の制覇を速めることは出來たとしても、それを創り出したものではあり得ない。<sup>13)</sup>』資本主義は上に擧げた三つの特質をもつものとして既にそれ以前より存在してゐたからである。資本主義の起源は早くも十三世紀に之を認めることが出来るばかりでなく、十六世紀に入るとともに眞に資本主義の時代が開始したものと見られなければならない。アンシアン・レジームと近代とは、ひとが普通に考へるやうに、革命によつて切斷されるものではなくして、密接につながつてゐるものとして理解される必要がある。『一七八九年の革命は一五五七年―一五九九年に始まる economic drama の最後の一幕』<sup>14)</sup>であり、單にそれを完成したに過ぎないからである。

12) *ibid.*, p. 41.

13) *ibid.*, p. 42.  
14) H. Hanser; The Characteristic Features of French Economic History from the Middle of the Sixteenth to the Middle of the Eighteenth Century. (The Economic History Review, Oct. 1933. p. 272.)



以上によつてアンリ・オーゼがアンシャン・レジームを如何に理解したか、明かとなつた。彼によればそれは資本主義の一時期に他ならない。したがつてまた彼の理解する重商主義は、フランス資本主義を育成し發展せしめるための政策および理論以外のものでは在り得なかつた。<sup>15)</sup> この意味からして、彼の見解を重商主義を初期資本主義と考へる見解に屬せしめることが出来るであらう。

### 三 アンリ・セーの見解

アンリ・オーゼは以上のやうに、フランス資本主義がすでに一七八九年以前から存在することを明かにしたのであるが、この見解は單に極めて興味あるばかりでなく、從來の通説を覆した點において革命的な見解とも言へるのでなからうかと思はれる。と同時にオーゼの見解がアンシャン・レジームの解明に關して多くの問題を提示したのみならず、經濟史學界の注意を喚起するに貢献したことは、例へばアンリ・セーも之を認めてゐるところである。<sup>1)</sup> さらばオーゼのこの研究成果は、アンシャン・レジームの經濟段階に關する限り、異論の餘地を残さないものであらうか。アンシャン・レジームの經濟段階を、現代的意義における資本主義の時代あるひはその第一段階として理解することが、果して正しい考へ方であらうか。結論をいそぐ必要はない。われ／＼は續いて經濟史學界の巨匠アンリ・セーの見解を問題にするであらう。セーの見解は「近世資本主義の起源」<sup>2)</sup> (一九二六年) および「アンシャン・レジーム下のフランス商工業の發展」<sup>3)</sup> (一九二五年) に明かであるが、われ／＼は主として以上の二著を論據としつゝ、なほ「フランス經濟史(中世およびアンシャン・レジーム)」<sup>4)</sup> (一九三九年)をも参照するとする。

15) Ibid., p. 264. なほ 拙稿「コルベール以前のコルベールテイスム」經濟論叢、56卷、4號、參照。

1) Henri Sée; L'évolution commerciale et industrielle de la France sous l'Ancien Régime. 1925. p. 49.

資本主義の起源が問題となるためには、その前にまづオーゼにおける如く、資本主義一般に對する基本的な規定が與へられなければならない。この點に關するセーの見解はどうであらうか。「近世資本主義の起源」の序文において、セーは先づ資本主義を動産の發達と同一視して考へるブレンタノ流の見解——それによれば資本主義は古代にも存在する——に關して次のごとく述べる。『たとひ資本主義が（古代に）存在するとしても、その場合に問題となるのは純然たる商業的あるひは金融的資本主義である。古代世界において、資本主義は決して工業に適用されることはなかつた』からである。ところで今日われ／＼が經驗してゐる資本主義社會について、その根本的な特徴は何であるかと問ふならば、それは『國際的大貿易の仲長のみでなく、同時にまた大工業の成熟と機械主義の勝利と一步一步顯著となる大金融勢力の優越と』がこれであり、『一言にしていへば、これらすべての現象の結合が、眞に近世資本主義を形造るところのものである。』なるほど十字軍以後、東洋との貿易が發展し、したがつて資本の蓄積が大いに進行したことは事實であるけれども、『しかしながら、言葉の近世的意味における資本主義について語ることは、如何にしても出来ない。』したがつて近世資本主義の起源を古代あるひは中世に求めることは謬りである。もし近世資本主義の遠い起源を中世に求めることが許されるとするならば、それは商業資本主義が單なる商業資本主義としての性格を脱しはじめたとき、言ひ換へれば商業資本主義がその支配力を工業にも及ぼしはじめたときでなければならぬ。セーによれば十三世紀がこの時期に該當すると考へられる。しかしながら『そこで問題となるのは依然として特に商業資本主義であり、殆んどもつぱらそのみであるが、しかしそれは工業活動を支配しはじめるところの商業資本主義である。』のちに分るやうに、それは未だ微々たる端初に過ぎない。』したがつて現代的意義における『資本主義組織の勝利は、十九世紀より以前のこと

- 2) Les origines du capitalisme moderne. (Collection Armand Colin.) 邦譯大淵彰三譯、「資本主義發達史概論」。
- 3) L'évolution Commerciale et industrielle de la France sous l'Ancien Régime (Bibliothèque Internationale d'Economie Politique.)

はなく、しかも殆んど到る處において十九世紀後半よりも前のことではないのである。<sup>4)</sup> われ／＼は早くも此處において、アンリ・オーゼとは全く異つたセーの見解の一端に觸れるわけである。現代的意義での資本主義、それはオーゼの理解した資本主義であり、セーの言葉でいへば工業資本主義 (capitalisme industriel) と呼ばれるべきものであるが、かゝる意味での資本主義の時代がすでにアンシャン・レژیムに始まると考へるオーゼの見解は、セーによれば謬りでなければならぬ。セーによれば、それは商業資本主義の時代あるひは商業資本主義の支配力が工業に及ぶ時代として理解されねばならないからである。とするならば、それは如何なる根據からさう言はれるのであらうか。このことが次の問題である。

十九世紀あるひはその後半よりも以前においては、工業資本主義の成立について語り得ないと考へるアンリ・セーの見解が、もしも成立し得るとするならば、さきにオーゼが擧げてゐる機械主義の發達、資本の集中、資本と勞働との對立などの事實はセーによつて否定されなければならぬであらう。セーは全體としてのオーゼの所説に關して、次のやうな批評を與へる。『オーゼ氏は資本主義が最近の現象ではないことを示さうとして、少しく誇張に失してゐる。このことは氏が工業資本主義はすでに十六世紀において大きな役割を果したといふことを明かにせんとした場合においてさうである。』セーによれば十六世紀以後、工業の發展が見られることは事實であるが、しかしそれは商業的形態の下において發展したものに過ぎない。『事實、この時期 (十六世紀) 引用者における分業および機械主義の重要性を過大視してはならない。そこで問題となるものは極めて幼稚な機械主義であり、分業は若干の製造業において現はれるに過ぎない。』機械の發達について語り得ないばかりでなく『工業の集中に關しては、この時期にはそれは全く存在しない。到る處において支配的であり而も將來ながく支配し續

4) Histoire économique de la France. Le moyen âge et l'ancien régime.

5) H. Sée; L'és origines du capitalisme moderne. p. 6.

6) Ibid., p. 7.

7) H. Sée; L'évolution commerciale et industrielle de la France sous l'Ancien Régime. p. 49.

けるものは小工業の制度である。』十六世紀においては以上のやうであるが、アンシャン・レジームの末期すなはち十八世紀の後半においては、この状態はいかに變化したであらうか。『大工業、工業集中の萌芽、あるひは又のちになつて眞の革命を遂行するに至る機械主義の起源については、それを把へることは出来る。しかし依然それは端初でしかあり得ない。』この時期において發明の獎勵が行はれ、新しい考案が盛んに試みられたことは事實であるが、しかし結局これらの新機械とても若干の織物業において實現された機械的道具 (machines-outils) であつて、従来の小工業にそのまま當嵌る性質のものたるに過ぎず、眞の machines continus は革命の僅か數年前において始めてイギリスから輸入されたものであつた。<sup>8)</sup> 機械については、このやうに端初しか語り得ないとするならば、機械を使用しない工場制度すなはち謂はゆるマニユファクチュアについてはどうであらうか。『支配的な制度は、中あるひは小企業の形態である。大工業は莫大な資本を必要とするであらうが、ひとは未だそれを所有し得るには至らない。……資本は多くの大工業を企圖し得るには依然あまりにも少額である。』<sup>11)</sup> 大工業はフランス革命に先立つ約二十年頃から次第に現はれるが、しかしそれとても例外的であり『小工業の寄せ波の上に浮んだ離れ小島』<sup>10)</sup>のやうな存在に過ぎなかつた。

機械および大工業については以上のごとくであるが、次に資本の集中に關してはどうであらうか。海上發見以來、商業資本の蓄積が進み、またそれが生産過程へ適用され始めることについては問題はない。しかし、このことから資本と勞働との分離、ひいては大工業の成立を直ちに導き出すことは出来ない。すでに述べたやうに、セーは、十八世紀の後半においてすらも、多くの大工業を建設するための資本は不足であることを確言してゐる。勿論、オーゼが述べてゐるやうな手工業組織の分解についてはセーも之を認めてゐるが、しかしそれが直ちに大

8) Ibid., p. 48.  
9) Ibid., p. 280.  
10) Ibid., p. 283.  
11) Ibid., p. 277.

工業の前提となるやうな分解であつたかどうかに關しては、セーは別個の解答を用意してゐる。この點についてはさらに後述するであらう。

かくのごとく工場制工業は勿論、集中的マニファクチュアについても、その一般的な存在が認められないとするならば、アンシアン・レジームの時代においてすでに近代的な資本と勞働との對立が現はれると考へるオーゼの見解が、成立したいこととなるのは當然である。言ふまでもなく、アンシアン・レジームの時代において、種々の紛争が発生することは事實であり、『十七世紀において親方と職人との間の紛争が発生し、しかもそれはア・プリアリに考へられるよりも、より一層頻々たるものであつたことは疑ひを容れない』のであるが、しかしそれは此處に述べられてゐるやうに飽くまで親方と職人との間の紛争であつて、それ以外のものではなかつたことを記憶しておかねばならない。だからこそ『それらは孤立的な運動であり、未組織の反抗であつて決して成功の機會には恵まれなかつた<sup>13)</sup>』のである。この状態はセーによれば、十八世紀においても變るところがない。『勞働者は依然として相對的に極めて少數である。小工業が常に支配的で、それらの小作業場において、親方と職人とは殆んど同じやうな生活をしてゐるため、自分らが違つた社會階級に屬してゐることを自覺し得なかつた』からである。勿論、十八世紀とくにその後半において罷業が頻發することは事實であり、それを否定することは出来ない。しかし、それを端的に近代的な意味での資本と勞働との對立であると考へることもまた謬りでなければならぬ。その前に、アンシアン・レジームにおける資本と勞働との在り方が問はれねばならないからである。かくしてセーによれば次のやうな結論が與へられる。すなはち『實際、アンシアン・レジームの末期においても未だ固有の意味における勞働者問題 (question ouvrière) は存在しない。——土地所有權が常に支配的な重要

12) *ibid.*, p. 286.

13) *ibid.*, p. 175.

性をもつてゐる。農民は最も多数の階級を構成し、彼等は彼等の土地が領主制度から自由になり、貴族的土地所有者の支配から解放されることを要求する。革命議會をして眞の社會革命を演ぜしめるに至つたものは農民問題 (question paysanne) である。<sup>14)</sup>

以上においてわれわれはアンリ・オーゼの見解に對するセーの消極的な批判とも言はるべき部分を檢出することが出来た。次には進んでセーの積極的な見解の内容を示さなければならぬ。アンシアン・レジームに支配的な工業形態が、工場工業でもなく集中的のマニユファクチュアでもないとするならば、それはセーによつて如何なるものとして考へられてゐるであらうか。問題はもつぱらこの點に集中される。セーによれば近世資本主義の最初の起源は、すでに遠く中世においてイタリー、オランダを始めとしてフランスにおいても現はれる。<sup>15)</sup> このことはオーゼによつても齊しく指摘されたところであるが、しかしそれはオーゼが理解した意味において資本主義的であつたのではない。なぜなら、そこで問題となるものは従來の地方的性質を脱した商業資本が獨立的な手工業者を流通部面を通じて自己の支配下に置くか、あるひは農村家内工業を普及せしめるかの孰れかの形態に過ぎず、『語の近代の意味における工業資本主義については、決して中世には存在しない』<sup>16)</sup>のであり、それはすでに前述したやうな商業的形態の資本主義と呼べるべきものであつたからである。かくの如く中世においては、工業資本主義ではなくして、商業あるひは金融資本主義のそれも端初が語られるに過ぎないのであるが、この商業あるひは金融資本主義は十六世紀以後、アンシアン・レジームの全時期を通じて著しい發展を経験する。しかしながら、それは近世資本主義ではなく、また直ちに近世資本主義を作り出すものでもあり得ない。それは十八世紀の末にいたつて、やうやく近世資本主義への移行を準備するといふ意味において、近世資本主義の起源を形成す

14) Ibid., p. 360.

15) II. Sée; Les origines du capitalisme moderne. p. 12, et suiv.

16) Ibid., p. 31.

るに過ぎないからである。したがつて、アンシャン・レジームの經濟を特色づけるものは、セーによれば正しく商業資本主義でなければならぬ。もしさうだとするならば、セーの言ふ商業資本主義なる概念は單に商業資本が存在し、發達するといふことではなくして、中世と近世との間に介在する經濟段階を表現するものでなければならぬであらう。とすれば、それはどのやうな經濟段階であらうか。

商業資本主義が成立するためには、まづ商業資本の或程度の發展がなければならぬ。それを可能ならしめ且つ擴大したものは、言ふまでもなく十五世紀の海上發見であり、この故に『近世資本主義の最も實り多き源泉は、疑ひもなく海上大發見である』と言はれるのである。海上發見に基く國際貿易とくに殖民地貿易の顯著な發展は、新大陸からの貴金屬流入と相俟つて、商業資本の醒しい伸展を可能ならしめるとともに、それを繞る近世諸國家間の争ひを激化せしめる。しかしながら、商業資本が如何に發達しやうとも、それが單に商業資本の發達にとどまる限りは、中世以來の社會はそれによつて根本的な變化を蒙つたと言ふことは出来ないであらう。いはゞそれは中世以來の手工業社會と封建的な農村との枠外において咲き誇つた巨花にすぎないからである。商業資本が商業資本主義といふ一の經濟段階を形成するに至るためには、蓄積された商業資本がなんらかの形で經濟構造の全體に關聯し、それを再編成するところがなければならぬ。セーの見解はこの點について必らずしも明確であるとは言へず、商業資本の發展すなはち商業資本主義と考へてゐるやうな個所も散見するが、彼の見解をいはゞ好意的に解釋すれば右のごとくでなければならぬであらう。したがつて十六世紀以來きはめて急速に蓄積されたフランスの商業資本も、その多くが『あるひは奢侈的な出費に浪費せられ、あるひは土地所有權または領主權の獲得に役立つた』<sup>17)</sup>にとどまつてゐた限りでは、嚴密には商業資本主義について語ることは出来ない。それ

17) Ibid., p. 49.

18) Ibid., p. 94.

が可能となるためには、これらの資本が生産的部面にも使用されることが必要である。ところで商業資本の生産的な使用は、いかにして行はれるであらうか。セーによれば『商業資本主義をして、その支配を生産の上に及ぼすことを可能ならしめたものは、まづ農村家内工業 (Industrie rural et domestique) である』<sup>19)</sup>と説明される。従来、單に中繼的な外國貿易にのみ従事してゐる商人は、次第に都市の手工業生産とは別個に、農村において營まれてゐた自家用あるひは地方的な農民副業に着目し、それと外國市場とを結びつけることによつて生産を支配しはじめるのが之である。かくして農村工業は大體十五・六世紀を起源としてアンシアン・レジームの全時期に亘つて廣汎に普及する。このやうな農村工業の普及とその重要性は、タルレによつて始めて明かにされたものであるが、<sup>20)</sup>彼によれば農村工業の特徴は、都市の手工業が直接消費者を目的とする註文生産を基礎としてゐたのに對して、農村工業は市場を目的とする生産であり且つ農民の副業としてその家庭内で行はれた點に存する。<sup>21)</sup>都市の商人は、これらの農民に原料あるひは時としては生産用具を貸與し、且つその製品を蒐集することによつて、都市の手工業とは異なる新しい生産組織をその下に展開したのである。これらの商人は多く製造業者 (Fabrique) あるひはマニユファクチュリエと呼ばれたが、その實質は商人に他ならなかつたことが特に注意されねばならない。例へばコルベールが創設し發展せしめた大工業 (Grande Industrie) は、その名稱からして工場制工業あるひはマニユファクチュアと一般に考へられてゐるが、セーによれば『これらのマニユファクチュアを近代的工場と想像することは出来ない』<sup>22)</sup>のであり、例外的に集中的工業が存在する場合においても、それは廣汎な農村家内工業を從屬せしめてをり、従つて『工業は依然として、多くの場合、農村家内工業としての性格を帯びてゐる』からである。かくして、これらの農村工業とくに織物工業が、何千人、何萬人を勞働せしめようとも、オーゼが考へたやうに、

19) Ibid., p. 134.

20) E. Tarlé; L'industrie dans les campagnes en France a la fin de l'Ancien Régime. 1910.

21) Ibid., p. 39 et suiv.

22) H. See; L'évolution; p. 136.



それをもつて近世的な工業と見做すことは出来ないし、近代的な資本と勞働との對立を其處に見出すこともまた謬りでなければならぬこととなる。それは問屋制度的な分散的家内工業にすぎないからである。セーはかうした工業形態こそマニユファクチュアと呼べるべきものであるとして、マルクス流の見解——オーゼも之に含まれる——を否定してゐるが、このことは極めて注目すべきであると同時に高く評價されねばならない點であらうと思はれる。<sup>23)</sup>さて、農村工業は十八世紀に入つてさらに普及し、織物工業とくに麻布、毛織物、絹布は勿論、新興産業たる木綿工業ですらその大部分が農村家内工業として行はれるといふ状態であり、これらの農村工業は低勞賃を武器とし組合規則の外に立ち且つ都市商人の支持を得てゐたために極めて有力であり、遂には十九世紀の産業革命を遂行するに至るのである。<sup>24)</sup>

セーは右のやうに問屋制的な農村工業をアンシャン・レジームの支配的な工業形態と考へるのであるが、他方、都市の手工業は農村家内工業の普及によつてどのやうな影響を受け、どのやうな變化を示したであらうか。セーによれば中世に成立した手工業生産の組織——地方的市場のために働き、狹隘な統制規則に束縛され、極めて制限された生産しか行はない——は、アンシャン・レジームの全時期を通じて支配し続け、その最後の二世紀には王權による組合制度強化と相俟つて、却つて一層強力なものとなる。しかし組合制度はその發展の絶頂に達したと思はれる十八世紀において、急速に衰退しはじめる。<sup>25)</sup>コルベール時代以後の貿易の著しい發展と農村工業の普及とは、都市手工業の狭い組合制度を遙かに凌駕したからである。手工業組合は農村工業したがつてまたそれを支配する商人に對して不斷の反抗を試みるが、他方、變化は手工業組合自體の内部においても進行する。すなはち從來のデモクラテイクな組合制度は分解して、その支配權は少數の商人貴族あるひは親方兼商人によつて

23) *ibid.*, p. 127. Origines; p. 140. なお Koulischer の優れた勞作 *L'industrie aux XVIIe et XVIIIe siècles* (Annales d'histoire économique et sociale. 1931, No. 9.) を見よ。

24) *Séc; L'évolution.*, p. 274. et suiv.

25) *ibid.*, p. 366.

掌握せられ、その他の組合員は次第に獨立性を喪つて前者によつて問屋制度的に支配される。したがつて都市の手工業もまた商人によつて再組織されるわけである。このことは既に見たやうにアンリ・オーゼによつても確認されたところであり、リオンの絹織業について彼が示してゐる通りである。これによつて親方兼労働者の地位は次第に悪化して賃銀労働者に接近し、一方、資本の集中が進行することは事實であるが、しかし工業の集中をそれから結論し得ないことは、すでにセーが屢々述べてゐるところであり、もはや説明を要しないであらう。

#### 四 總 括

以上においてわれわれはアンシアン・レジームの經濟段階に關するオーゼとセーの見解を検出することが出来た。オーゼによれば、それは資本主義そのものとして理解せられ、機械の導入、資本の集中、労働と資本の對立がすでに見られると説かれる。工業形態に即して言ふならばオーゼはアンシアン・レジームの工業形態を集中的工業あるひは進んで機械制工場工業と考へることによつて、アンシアン・レジームと近代との連續性を主張する。したがつて重商主義は、オーゼにおいては、かゝる資本主義をフランスに移植し發展せしめるための一切の方策として理解せられ、すでにコルベール以前から存在し十九世紀において完成されるものと考へられてゐる。

セーは、これに對して全く反對の見解を次のやうに表明する。まづ機械の導入はアンシアン・レジームにおいて殆んど問題となり得ない。たとひ機械の導入があつたとしても、それは分散的な家内工業にそのまま使用されるやうな機械にすぎず、したがつて近代的工場工業に使用されるやうな機械がアンシアン・レジームに存在し使用されたと考へることは出来ない。資本の集中については、十六世紀以來商業資本の顯著な集中が見られるこ

とは事實であるが、それが直ちに生産過程へ移行したと見ることは出来ず、むしろアンシアン・レジームにおいて新しい工業を建設するための資本は一般に不足勝ちであつたと考へられる。商業によつて蓄積された資本が工業生産に向ふ場合、それは一般に農民勞働を對象とした農村家内工業の形態を採つたがために、集中的工業の存在は認められないし、認められるとしても例外的でしかあり得ない。商業のこのやうな生産過程への進出とともに都市の手工業組合は分解し、農村においても賃業者が発生し、貧富の懸隔は一層それによつて増大するけれども、しかしそれを以つて近代的な資本と勞働との對立と考へることは出来ない。セーはこのやうにオーゼとは全く對立的な立場からアンシアン・レジームの經濟構造を明かにしつゝ、結局それを工業資本主義ではなくして商業資本主義であると考へる。工業形態について言へば、謂はゆるマニユファクチュア説の誤謬を指摘しつゝ、問屋制度の支配下にある分散的家内工業が當時の支配的な工業形態であると述べ、當時においてマニユファクチュアの名の下に呼ばれたものは、この形態の工業に他ならないと考へる。重商主義が育成し獎勵した工業も、かゝる形態以外のものでなく、したがつて重商主義を近世資本主義の起點に置く考へ方は、セーの見解を貫くかぎり、承認され得ないものとなるであらう。セーはこのことを特に問題としてはゐないが、しかし例へばコルベールの政策について『それは出来得るかぎり多くの金銀を王國內に引き寄せ、且つ正貨がフランス外へ流出することを妨げるためのものであつた』と述べ、また王權の重商主義政策は『外國依存を無くし、國內生産を保護し、王國內で製造された物品を輸出せんと努めることによつて、貨幣量を増加せしめることに存する』(傍點引用者)と述べてゐる點より見るならば、彼が重商主義を商業資本主義的觀點から理解してゐると考へて差支へないであらう。しかもセーは重商主義は單に個人的利益を目的としたのではなくして、重商主義による貨幣の豊富は實に

1) クーリツシャーもこの點を承認してゐる。前掲 p. 16.

2) Sée; Origines; p. 70.

3) Sée; L'évolution., p. 128.

『國家權力の本質的條件』として考へられてゐたことを指摘してその存在理由を承認してゐるが、この點は恰かもクーリツシヤールが重商主義を當時の不斷の戰爭状態とそれによる國防の必要性に歸してゐることと共に現代の重商主義解釋の上において注目すべき點であらうと思はれる。

かくして、われわれは全く相對立する兩つの見解の前に立たされる。アンシアン・レジームはオーゼの言ふやうに近世に直接に含まれるものであらうか、それともセーの考へるやうに近世と中世とを媒介する独自の經濟時代であらうか。これに對して性急な結論を與へることをわれわれは慎まなければならないが、憶ふにこのことは單に實證の問題たるとどまらず歴史解釋の問題でもあらうと考へられる。アンリ・セーの見解は、現代經濟史學界の最高水準と言はれる前記のクーリツシヤールによつて殆んどそのまま承認されてゐるところよりすれば、實證的にも正しいものと考へてよいと思はれるが、さらにアンシアン・レジーム以後のフランス經濟の特殊な發展形式——すなはち産業革命がイギリスより遅れたこと、またそれが完全には遂行されなかつたこと、金利生活者の増大、少土地所有農民の殘存のみならずその増大等々——に鑑みるならば、アンシアン・レジームにおいて既に資本主義の時代が開始すると考へることは、恐らく正しくないと言はなければならないであらう。かくして従來、端的に近代に屬するものとして考へられ、言はゞ近代史のなかに埋没せしめられてゐた重商主義を新しく發掘することが可能となるとともに、近代理論の側から不當に誤謬視されてゐた重商主義思想を正しく評價する途が開かれると言ひ得るのではないであらうか。

しかしながら、たとひセーの見解を承認するとしても、問題はなほ殘るであらう。その若干を述べておくならば、まづ第一はセーの商業資本主義なる概念についてである。アンシアン・レジームを一の經濟段階として把へ

4) Koulischer; Ibid., p. 20.

るかぎり、商業資本主義なる概念は單に外國貿易の顯著な發展とか經濟生活の動産化とかのみを意味するにとどまらず、中世の經濟構造とは異なる新しい經濟構造を意味しなければならないことは當然である。この點についてすでに述べたやうにセーの見解は必ずしも明確とは言へないものを残してゐる。そして、もしも商業資本主義なる語が、主として貿易商人によつて率ゐられる問屋制家内工業を中心として形成せられる經濟段階を意味するものであるとするならば、今度はなぜそれを特に商業資本主義と呼ばなければならないか、例へばそれを問屋制家内工業の時代と呼ぶことは出来ないであらうか、といふ疑問が生じてくるであらう。第三の問題は、アンシアン・ジレームの時代に一般化する工業は、セーにより主として農村における分散的な家内工業であつたことが明にされたのであるが、次にはそれらの農村工業が全體としてのフランス農業のなかへどのやうにして組入れられたか、それによつて中世以來の農業構造がいかなる變化を蒙つたか、が問題となる。この點を明かにしなくてはアンシアン・レジームの經濟段階を全體として論ずることは出来ないからである。さらに詳しく言へば、セーはアンシアン・レジームの末期において少數の工業が工場制を採るに至る事實を挙げつゝ、その原因を單に技術的な必要に基くものと考へ、機械の輸入によつて直ちに工場制工業が一般化したと論じてゐるが、他方において、集中的工業がフランスにおいてはイギリスよりも約半世紀も遅れたのは土地所有權と農業制度の發展が兩國において異つてゐたことに基くと説明し、フランスの農業史の特色として、豊富な勞働力を工業に供給し得るやうな農業革命が進行しなかつたことをその理由として擧げてゐる。<sup>5)</sup> このうち孰れの見解がセーの見解として合理的であるかは暫らく措き、もし後の見解が正しいとするならばアンシアン・レジーム時代の工業はフランスの農業構造と有機的につながつてゐたと考へねばならないからである。もしさうだとするならば、アンシアン・レ

5) See; Origines; p. 142, et p. 143.

6) See; Origines., p. 178.

I.M.の問題は直ちには集中的工業あるひは機械制工業へ移行し得ない性質のものであつたと言はざるべきではないであらうか。かくして資本主義の成立とそれ以前との間には、例へばセー自身が近代企業家の生ひ立ちについて、またマックス・ウェーバーが資本主義の精神について明かにしてゐるやうに、容易には打ち越え難い断絶がその間に存するのではないであらうか。セーの見解を繞つて、わたしは以上のやうな疑問を禁じ得ない。これらの問題のうち、わたしはアンシアン・レジームにおける農業構造を明にし、それと重商主義時代の工業との關聯を問題にし、かくして全體としてアンシアン・レジームの經濟構造を明にすることなくしては、その經濟段階について決定的な解答を與へ且つ重商主義の本質を究明することは出来がたいと考へる。したがつて、このことが私の次の課題となる。